

アメリカンスクール幼稚園児の 「なまいき」の記録とその絶対的自立心

丹野しげ子

一

「なまいき」と同じ意味の言葉がアメリカにもあるだろうか、日本に長く住むアメリカ人ベニー（西町インターナショナルスクール教師）にたずねてみたところ、近い意味の言葉はあるが、日本語の生いきとはやはり感覚が異なるという。

例えば、自分の現在のレベルより上にあがりたいと思っている言動に対して *too big for your briches*（おまえのズボンのサイズにしてはやる事が大きすぎるよ。）まだまだその時期ではない。親や親戚の人がよく子どもに使う。（以前は教師も使ったがこれは子どもの意欲をそぐということからあまりつかわれなくなったという。）

又、教室で子どもが教師の質問を馬鹿げていると思い、まじめな答え方ではないがしかし間違っていない答えで返す態度などを *sneering*（軽べつを尊敬を欠いた言動によって示す。）といい教師はそういう言い方はないだろうという指摘すること多い。

自信過剰のうぬぼれ屋に対しては大人から子どもへ、又子ども同士の間で *“smarty-pants”*（うぬぼれ屋、青二才）と言う表現がある。

又、生いきな言葉態度に対して *“sassy”* とか *“cheeky”* という言葉があり、大人から子どもに対して「おまえは悪い言動をしている。それによって自分はいやな気分になってきている」という意味をこめて *“you are saucy”* という。一般に子どもの生いきな言動に

対し小さい時はあまり構わないでそのまま見ている事が多いが中学高校と進むにつれ大人の方でもその態度をおさえ出しやばらないようにする。皆の前でもその態度を指摘したりするが、逆にこの指摘を喜び目立って嬉しい子どもは「それ思うつぽだ。よく自分をみる!!」と生いきを誇示する場合が多い。

ベニーは高校時代自分の力がどの位あるのか試したくていろんな場に顔をつっこんで行動していたら、ある教師たちからは生いきだといわれたという。出しやばらないで自分の場所にひっこんでいるというわけで、次の言いまわしがあると言う。*“put some body in their place”* 誰かを生いきな態度をとったらそれをもっと力のあるものが

こらしめてやって、その役で第三者に話す時「あいつをあいつの居場所にもどしてやった」と表現する。

ベニーは、生いきは体内からでるエネルギーであっていつも大人のいう通りにしては自分の力が確かめられない。大人との戦いの中で、生いきといわれようと、自分の力をはかりながらのびていくのではないだろうかという。アメリカ人は、年上なのだからとか年下のくせにとかいった風にあまり年令にはこだわらないという。能力（例えば 頭脳とか財力）がなかったら、あまり大きな口はきけないのではないかと思うという。

又、生いきという言葉のもつ、いわゆる おませ、早熟という意味に近いのに *“precocious”* という語がある。

“having some faculties developed earlier than is normal: (of action, knowledge etc), marked by much development,” (言動・知識等に於いて普通よりもいちじるしく早く進歩をみせている状態)

以下のアメリカンスクールの幼稚園の子ども達にみられる生いきの例はこの“precocious”の角度からながめてとられたものが多い。

二

なまいきな子というので一人忘れられない例がある。ボブ(当時四才男)彼には一人だけ友だちらしきのがいたが、その子は他にも友だちがいたから、ボブは一人ぼっちになりやすくその上、彼は友だちと楽しく仲よく遊ぶという方法を知らなかったから皆に好かれていなかった。そこで彼は人気とりの為にクラスの子に物をあげたりしつくつきまどつたりとり入ろうとしたりし、あげくにケンカになり教師の注意の言葉にさからい口答えし、怒って泣き、大変に大人から見生いきにうつる子であった。しかし当のボブはそれは必死に自分の全能力エネルギーを出して自分の欲するものを手に入れるべくあらゆる手段を構っていたのだらう。教師にとっては問題児であらうとも彼は一生懸命生きようとしていたといえるのではなからうか。私は先生方にクラスで生いきと思われる子どもたちの毎日の生きている姿をきいてまわってみた。

——大人の世界で育った子

① キャシー(六才二ヶ月女) 一人大人びたすました表情で歩てくる。一人っ子で両親から大人扱いされて育ったせいか三才の頃より大人びた言葉を使ひ仕種も大人びており一人遊びをしてゐた。四才の頃も友人をほとんど必要とせず、五才児になって少しづつ友達と遊ぶようになってきたが、その話題やら話し方があまりに他の子とかけ離れているせいか、又、それ程必要でなせいか強い結びつきの子はいない。教師はキャシーが一人を苦にしている訳ではないから強いて友達と遊ばせようとはしないが、余りに教師サイドとばかり話したがる時は子供同士の中へもどしてやるという。

キャシーの家にリンダ(五才半女)が遊びにく約束となっており幼稚園の帰りにキャシーの車にリンダも同乗したが、リンダはあまり機嫌よくなく車の中であばれたらしい。キャシーの母親が気を悪くしてもうリンダは家によばなうとつたところ、キャシーは、
“Well, try it again, well, we will see how she behave, good or bad,”
(もう一度ためしてみましよう。そしてどんな風なふるまいをするか、良いか悪いか みてみましよう。)と母親にこたえたという。

又、キャシーがランチタイムに話しているのを教師が耳にして近づいてみた。

○Kathy “My mother thinks so and

so... , is making big mistake,
(お母さんはこう思っているわ。——は大きな間違えをしているの。)

○Teacher “Why?” (どうして)

○Kathy “She is only letting, children eating at kitchen table.”
(彼女は子ども達にいつも台所のテーブルで食事させているのよ。)

○Teacher “What’s wrong with that?”
(それがどうして悪いの)

○Kathy “If they don’t eat at dining table, they don’t get proper oper manner.”
(もし子ども達がきちんと居間のテーブルで食事しなかったら

正しいマナーは、学べないのよ)

教師はこれは子どもが普通話題にする様なものではないという。他の子ども達もキャシーに立ち打ち出来ないと思ひ、共通の話題がなかったりで自然に、別格扱いにしてしまう。キャシーの方も自信に満ちて堂々としている。クラスの中で前述のリンダがキャシーと比較的仲良しであるが、リンダは時おりキャシーに対して同じレベルの能力で言葉をうまくかえせない為にフラストレーションに陥り怒ってしまう事があるという。

② リンダとケーティ(両者、四才一五才頃・女子)。前述のリンダは、三才の頃より大人に対する振るまい方を良く知っていて教師は教室に参観者がくるとリンダにその世話をまかす事ができたというが、しかし他の子どもには

一切興味を示さず三才の誕生日に招いたのは全て大人だけであったという。

このリンダが四才になり他の子どもにも少し興味がではじめ、はじめて友だちが出来た。選ばれた相手はケーティ。ませていて口が達者で非常に人間関係のよみとりの感度のすぐれた子であり、美しい長い髪と可愛らしい顔で自分もプリンセスの様にふるまい、まわりの子も又彼女に一目置いていた。

ケーティはリンダが彼女の事を大好きで、自分の言葉一つでリンダを動揺させる事が出来るのを知つてそれを楽しんだ。ケーティは他の子達と仲良くしリンダをはじき出し“I don’t like you, I am not your friend.”(あなたなんか嫌いよ。友だちじゃないわ。)

と云つてカッとさせる。又、自分の絵が一番良くてリンダの絵はよくないと云ひ出し始めはリンダも我慢してとり入っているが傷ついて怒り出すのをおもしろがる。リンダは口で勝てないから当然手がでる。大ゲンカがはじまる。ケーティは又十分もするとリンダに近づくベストフレンドのように仲よくふるまう。ケーティは時々本当によい友だちであつたがリンダを言葉で傷つける事をゲームのように楽しんだらしい。リンダは子ども同士のつきあいを知らなかったから生れて初めての経験が悪すぎたと教師はいう。

③ バトリック(当時四才男)

数年も前の事になるが忘れられない不思議な子がいたと或る教師はいう。非常に独立心の強い自主的な子であつ

た。家庭においてもそのように育てられていたようだ。幼稚園で友だちとも遊ぶがその関係はクールで、又、ケンカをしたり泣いたりという事がない。一人でいろいろな楽しむ事ができる。頭もよく工夫して物を作ったり絵をかくても決して見せびらかしたりほめられようとする行動はない。クラスの中に一人大人がいるような感じで、教師側としても他の子に対する様なスキシンツプとかもはばかれるというか、何か子ども扱いにしてさわれない感じがしたという。パトリックにとってはむしろ幼稚園などスキップして中学とか高校とかのように一人でどんどん勉強していく様な雰囲気の方があっていいのではないかとよく思ったという。いろんな大事な事がもうすでによく解っているような雰囲気の子だったらしい。

——強くありたい子どもたち

子ども達はよく教師をテストする。例えば遊んではいけない場所で遊ぶなどといった行為を教師がとめにかゝっても少しずつ様子を見ながらわざと続ける。片づけの時間にもわざとやらないでいて教師がどう出でくるかみている。教師の注意に反抗的行動にでている。これらは子どもたちが相手の力を量っているわけであってそうしながら自分の力がどの位あるのか試しているわけそこには自分はずっと強いかも知れないという意識がある。又、大きな強いはずの大人をからかってさからって、かつとさせておもしろがる子も

いる。大人に較べればほんとに小さな自分が強い筈の大人を逆にカッとさせてあやつっているのだから自分の方が強い気分になって楽しいわけである。子ども達はしよつ中“*I am strong*”という言葉を口にする。強いが弱いかは人生の一大事であり彼らは日常あまりにも自分の小ささを自覚させられてるが故に強くなりたいたのではなからうか。

ピーク（四才男）

“*I am bigger than you,*”

“*I can jump higher than you.*”

（ぼくは君より大きくよ）（年とか身体）

（ぼくは君より高くジャンプできるぞ）

ニコラス（四才男）

“*I am eight years old, my brother is stronger than your brother, my brother can hit up your brother.*”

本当は四才になったばかりであるが「ぼくは八才だよ」実際は姉だけであるが「ぼくの兄さんは君の兄さんより強いぞ。ぼくの兄さんは君の兄さんになぐってやつつけちゃえるさ。自分に何ができるか、年令が上か、どちらが強い、大きいかはいつも我慢できる要素となる。又、リズィ（三才、女）と前述のマークはよく二階の大きな子たちのクラスに行きたがった。理由は自分達は十分上のクラスにいく程に強く大きいと思ったからであった。教師は二人にそれを許可した。二人は意気込んで何度か出かけたがやはり異和感

を覚えてかそれ程長くは居れなかったが、いったという事にひどく満足したのであった。

「強い」という言葉は子ども達には本当に魅力があるらしく、例えば、

リチャード（六才二ヶ月男）

ゲーリーが教師のところにあわてて「リチャードが、ぼくを打つ。」といっかけてくる。話をきくうちにそれは本気ではなくておどかしのつもりであったと解り「それは *weak people*（弱人々）のする事、*strong people*（強人々）はそんな事はしないと云うと、リチャードはたゞ最後の *strong* に強く気持ちをひかれ “*What do strong people say?*”

（強い人はなんと言ふの？）と興味津津、目を輝かせてたずね返してきたという。

自分を強く見せようとしてかどうか、子ども達はよく他の子に威厳を示そうとしたり反対・抗議する時に、足を左右、又は前後にちよつと開き、両手をそれぞれ腰に置いてちよつとえらそうな声でものを言う。

フラン（四才半、女）は、教師が黒のふわふわのセーターをきいているのを、毛皮をきていると思ひ込んで、藤に手を置く例のポーズをとりながら、“*Why people always kill animals and make things like that?*”

（どうして人はいつも動物を殺してそういうものをつくるの？）と “*like that?*”（そういうもの）のところを、語気強く非難がましくいったという。

——Good Guy and Bad Guy.

子ども達はよく “*We are good guys.*”（ぼくらは良いやつさ。）とか “*He is bad Guy.*”（彼は悪いやつさ。）（*Guy* = 男やつ、少年、人）とか言う。

前述のリチャードは突如、昨年卒園していった一つ上の子ども達のグループ、それは知的にも腕力にもすぐれ、さんざんふざけたりおどかしたりして毎日楽しんでたグループで教師達は冗談にマフィアグループなどと呼んでいた。を思ひ出し、今はリチャード達が、その *bad guy* の年令に入ってきた似た様な事をしてるのに、“*What had happened to those bad guys?*”（あの悪い子たちに、何があの時、おこったの？）と教師にたずねたという。マフィアグループが強烈なイメージを残していったわけであるが、良いか、悪いかは、自分や他人を評価する一つの尺度となつてゐるのはなからうか。

アヤ（三才半女）は教師が、庭である男の子に注意していたところ、つかつか近よつてきて「いじめてはいけませんよ。マシニーは、*good boy* なんだから。」と抗議した。

前述、リチャード（当時五才）とその仲間がつくつてゐるグループと新学期に階下のクラスから上のクラスに移ってきた、一才下のヘンリー（当時四才男）とその仲間のグループの間に、新学期早々、小ぜりあいが生じた事があった。（園では、階ごとに三クラス

オープン時間のがある。)リチャード

グループは、目ざとくヘンリーグループを発見し、このグループが bad guys であり、ケンカを好むことを知り、自称 Good Guys のリチャードグループは、相手の力を知りたいと思い、ケンカをしかける。これ又、Good Guys であるヘンリーグループも、これらの bad guys に立ちむかい何度か、かなりケンカをやりあったあげくお互いの力がほぼ同等であると思極めた時、そのケンカはピタツととまり、お互いは干渉しあわなくなったという。教師はそれをみていて、まるでサル山のボスの決定をおもわせるようなおもしろい戦いであったという。子ども達は、一般に、ケンカの役でいつまでもそのことに執着しないでカラツとしている。又、自分と異質の人間だと思ふとそれ以上近づいたり構ったりしない。

——ブライドの高い子どもたちは

マリアン(五才三ヶ月女)気位が高く、なぜか自分だけは人とちよつと違ふと意識してか、四才の頃、よく皆でサークルなどつくつても一人だけはずれてみたりした事がよくあった。他の子が、マリアンに「顔がちよつと汚れてるわよ」と注意しても「I don't care. (そんなの構わないわ)」とその場で、絶対鏡をみにとんでいつたり顔をさわったりしない。子ども達は直観的にマリアンの性格をつかんでいるから、そういう態度をとられても「あつ、そう」という感じで笑つてただけ

で、終わりとなる。

ジェームス(五才一ヶ月頃・男)

ジェームスは、運動能力も高く、よく理屈をのべたて頭の回転も早い為何といつてもクラス一のチビ、それにもかへ離れて小さい。ミーティングの時間に背丈を棒グラフ風に仕上げたものを各自がみて気づいたことをいう。ジェームスの番がきた。彼は気位が高く、自分でいづも一番になりたいタイプでもあり、どうしたつて、クラスで一番小さいとはいいたくない。かといつて他の事を言うには自分のポジションは目立ちすぎ、言葉につまつた。教師は何もいえないんじゃないかと心配したが、言わなかつたらもつと可哀いそうだが、何可言わせばと待つた。ジェームスは十分位はたと考えこんだ。ついに彼は「I am different from anybody.」(ぼくは、だれからも、違つてゐる。)と自分の背丈を小さいといわずに表現した。

ジェームスは他の二人と三人組をくんでいたが最近二人とも相ついで引つ越しし、一人ぼっちになり、やゝ不安なせいか、ちよつとした事に対して、も、サンキュー、サンキューを連発しているという。

——リーダーになりうる

いろんな性格の子が、八時半〜午後二時半まで一緒に生活している場の中でどんな子がリーダーになっているのかみてみたい。

①カリスマ時人気のヘンリー(五才二

ヶ月男)

前述のヘンリーは三・四才児の頃よりクラスで正義の味方・ポリスマンの存在であつたが五才になりすごい人気でリーダーの氣質を発揮しはじめ子供達同士困つたり助けが必要となると、「lets go get Henley, He will protect us」(ヘンリーをよんでこよう。彼は僕達を守つてくれる。)という。

教師もヘンリーの能力を認め、例えばクラス内のもようがえなどに困ると彼にアドバイスを求め、非常によいアイデアがかえつてくるという。ヘンリーもよく見て考へていて「why don't you do that...」(どうやったら...)と自分から教師にもクラスメートにも、非常に論理的アイデアを提供する。家庭内でも長男で弟達にとつてのリーダーであり力をもつてゐるが、時おり家で彼自身の方がよいアイデアを持つてゐると思ひ母親に従わない為に母親はイライラさせられる事もあるという。幼稚園でヘンリーは自信に満ち、歩き方、座り方、発言の仕方など本当に堂々とした風格があり、他の子どもとはちよつと違ふと自分で意識している雰囲気も感じさせる。このヘンリー、冬季、他の子がオーバーやエリ巻きで着ぶくれて外に出て遊んでる中一人薄着で走りまわつてゐる。冬季は薄着で外に出ないことが原則になつてゐるが、ヘンリーのみは、体内からエネルギーをすぐ発しているヤツか、又は彼が十分、自分の事について判断出来ると思つてか、オーバーなしでも何と

もいふれない。ヘンリーは strong と教師も思つており他の子ども達もなぜかヘンリーが薄着でいても何もいわない。ヘンリーグループの二人、スティヴとティムはヘンリーに魅惑されてゐるものの、常に押さえられてるやうに感じるのは二人だけの遊びの中でたまにヘンリーを弱者に仕立てたりしてゐたが最近自分達のやりたいものをいだし遊ぶやうにもなつてきた。「It is my decision to play at here. 大物(?)のヘンリーは口論したりするタイプではなく、彼等のはじめた遊びを一緒に楽しむ行なうか、又は一人で追うことをはじめ、他の子を自分の意のままに動かそうとはしない。

②フランク(五才・男)とジェイ(四才半・男)

フランクは昨年クラスで一番力も強く、口も達者で彼が話しはじめるとクラスの誰もが黙つてしまふ程であつた。明るく元氣すぎるほどの子であつた。新学期(九月)になつてからは比較的大人しくみえる。クラスに同等の体力を持つ子と知的に優れた子が新しくきた為らしい。特にジェイは体力ではフランクにかなわないが非常に知的能力が高く、創造的で、又性格がやさしい為にはクラスのリーダー的存在になつてゐる。フランクも彼に一目置きジェイの言うことを聞こうとする。ジェイは、常に話しあうという事を重視し、トラブルに巻き込まれる前に相手に説明しそのトラブルに巻きこまれまいとする。例えば、誰かが、黙つてジェイ

の使っている積み木の中から一つとらうとすると、力でとり返そうとはせずじ、

“you should ask to me about block, I would give it to you.”と話す。

(ブロックが欲しいって僕にいつくれば、それを、君にあげるのに。)

ジェイは生来、やさしい性格で、相手がジェイのことを聞こうとしな場合、感情が高まって泣きだすことはあっても、力づくでやり返すということはほとんどないという。

③五・六才児のクラスでは、リチャード。

前述のリチャード(六才・男)がクラスをリードしている場合が多い。楽しく体力もあるロイという男の子もなかなか人気があるが、やはり創造的で言葉も豊富なリチャードが、力をもっている。最近、彼と教師の間にこんなやりとりがあった。リチャードが友人と二日がかりで箱や板やらを利用して何か作り上げた。

○Richard “Do you know who works at newspaper? Why don't you call them and take a picture and write about us. Because we made a machine” (誰か新聞社で働らさうな知ってる。彼等をよんで僕らについて記事をかして写真をとってもらわなう? なぜなら僕は機械をつくったのだから。)

○Teacher “Tomorrow, well, my husband is coming, maybe, he can help you really make it work,” (明日

日私の夫が幼稚園にくるから、多分、彼がその機械を本当に動くように手伝えるわよ。)

○Richard “Well, Let's us try to make it works, then, we don't need him.” (そう、じゃあ、僕達に機械が動くようにできるかためさせてよ。それが出来れば、僕達は、彼の助けはいらないよ。)

○Teacher “Yes you are right.” (そうね、その通り。)

教師はリチャードの話題とつい、考え方といい、そうその通りというより他に言いようがなかったと笑った。

——今、子どもたちに、うけてる言葉
—— He hurt my feeling. ——

子ども同士いろいろトラブルが続いた際、教師と共にいろいろ話したらしい。(五・六才児のクラス)その後、この言葉は、子ども達の中ですごい人気で、この言い方によって何かい人びた気分を感じられるのかよく使われている。例えば、前述のキャシー(六才・女)と教師のやりとり。マーティが鉄棒で何か演じて教師に見てもらったくて遠くから何度もよんだらしい。

○Kathy “You hurt Marty's feeling.” と厳しい表情。(あなたはマーティの感情を傷つけたわよ)

○Teacher “What did I do?” (私が何かした?)

○Kathy “Well, Marty called you five times. But you didn't even

turn around. You really hurt her feeling.”

(マーティは五回もあなたをよんだのに、ふりむきもしなかったわよ。あなたは本当にマーティの感情を傷つけたわ。)

当のマーティはケロリとしていたが、キャシーにとってみれば許せない態度にみえたのだらう。感情を傷つけると言う言葉が流行した背後には、日頃、子ども達がよく自分の感情持ちがどうなのか表現し又、相手の気持ちはどうなのかといった事が問題にされているからであらう。(ハッピーだとか、おかしい、淋しい、怒ってる、かなしい、一人でいたい等々)。又、子どもたちが、相手に、言葉や腕力で、いやなことをされると他の子や教師に以下のような表現をして訴える。

He picks on me

(困らす、悩ます)

He teases me (からかう)

He cheats me (ずるさす)

He is mean to me

(さやらしさ、さやな)

He hurt me 等々

その結果、自分の感情を、

I hate him (大嫌さ!!)

I don't like him (嫌さ)

I'm not your friend,

(もう友達ぢゃない。)

と、はつきり言ひ、わりあい、しゅ

中耳に入ってくる。

子どもの中にはよく相手の気持ちを

みねめる子もさう。

キャロライン(五才九ヶ月・女)とリチャード(六才男)(前出)はクラスは違いますがとても仲良しである。キャロラインは頭がよくそしてひかえ目であり、友だちや教師と楽しんで話をすることが出来る。リチャードは開放的な性格で感情もすぐ外に出し内部で屈折しない。ある日、キャロラインとリチャードは三クラスが合同になる時間に仲良く話しをしていたが途中、リチャードが、用事が出来て場を離れた。そこへジョーがやってきてキャロラインと楽しく話しをはじめた。そこへリチャードがもどってきて仲よしのキャロラインを無断でとられたと思っかけてきなりぶった。ぶたれたジョーは、なぜ自分がぶたれたのか推測もたらずその不当な扱いに場を離れて泣きだす。そこへキャロラインがなぐさめにやってきいて“Don't Worry, Don't Worry.”と声をかけた。(心配しなう)このDon't Worryの言葉の言ひ方、仕種、声などにキャロラインがこの三者の關係と心の動きを十分読みとった上でいった言葉を教師には感じられたとさう。

このリチャード。ある朝、キャロラインにもう好きじゃないといわれてなんとなくしよんぼりしていた。通りかかった教師が声をかけると以前この教師がキャロラインはよくジョークを言うわよといったのを思いだし、今朝のことばもあれはジョークだったのかと真剣にたずねた。

―自立していく子どもたち

幼稚園では教師を名前(敬称なし、例、バーバラ!!とか、まり!!というように。)のみでよぶ。大人も子どもかわりはない。ここでは教師は子どもにとって友だちであり困った時には助けてくれる人であり、子ども達は教師と同等の意識をもっているのではないだろうか。前述のキャンシーと教師のやりとり(感情を傷つけたの項)もそうであり、次の例も教師の自分への扱い方に対しはつきり意見をのべているのである。ピーター(四才七ヶ月・男)がランチタイムにおしゃべりをしすぎていていつもその為、終わるのが遅くなると注意されて、

“I don't like the way you treat me.”(あなたの僕に対する扱方はいすきじゃないよ。)と言返す。ピーターは家庭で三番目の子であり、そつがなく要領もよく他人にいやな思いをさせない術を身につけていて人に文句を言うのもうわれるのも嫌というタイプ。スマイルが魅力的で人をちょっとからかった後などには、心ずその武器で相手の気持ちをやらわけてしまうという。

幼稚園では independent な(自主的、自立した、独立心の強い)子どもになるよう教育してゆく。イエスカノイカを、よく子ども達にたずね、彼等もはつきり意志を表明することを求められる。あいまいな態度はひとめられなう。三才児のクラスでも今、自分が教師の助けを必要とする時、又、友だ

ちに何か頼みたい時、一緒に遊びたい時、自分からたずねなければならぬ。又、トラブルが起きた際も、お互いの言い分、気持ちなどはつきり話しあわせる。教師側も自分の方から、決めつけたり押しつけたりはしない。

自分の立ち場をはつきりさせようとする子どももいる。たとえばエリック。時々、幼稚園では誰のことが好きかなど、子どもの楽しい話題となるが、エリックがまじめな顔で友だちに朝早くたずねてた。

“Do you think Anna loves me more than I love her?”

(君はアンナの方が、ぼくが彼女の事をすきな以上にぼくのことをすきだぞ、思うか?)

よく選択という方法がとられる。(もちろん選択の範囲はよく考えられたの上だが)教師はこんなふうに言う。

“you make choice, If you do this, you will be.... It's up to you, It's your responsibility. If you choose it, you stick with it.”

(どちらにするか選びなさい。君がもしこれをするなら……こうなるでしょう。

それは君しだいだし、君の責任だよ。もしそれを選んだとしたら、ずっとそれをやりなさい。)

教師は自分たちも Consistent (終始一貫した、矛盾のない)な態度で子どもにむかおうとし、又、子どもにそれを考えさせようとする。logical sense-

quence (論理的帰結推論)が重んじられ、子どもたちは話し合いの中で、原因や結果を考え、それを次の行動のときの判断に役立てていけるように、合理的な判断ができるように、手助けされる。

三

子どもたちのエピソードを読みかえしながら、英語と日本語の違いにも目をむけさせられた。まずよく言われる事だがはじめに主語が「アイ」か「ユー」か (I or You) はつきりさせないと文が成立しない。これだけでも自己の意識、他者の意識は強くなるのではないだろうか。又、父や母教師が子どもに対して「お母さんはね……」とか

like the way you treat me.” や “I hate you.” など。

次の二つは友人から聞いた話だが、彼女の知人(アメリカ人)の息子は日本で長く生活し英語も日本も同じ位に話すが、ケンカの時だけは英語でないと勝てないそうだ。

英語には、直接的に相手をグサツとやっつける強い言葉、いわばケンカ用語の様なものが、日本語にくらべて、ずっと多いらしい。

もう一つは日本人の女性の例で、やはり二つの言語を自由に操り両方の文化に接して育った人だが、なぜか日本語を話す時の彼女と英語を話す時の彼女とは、表情・動作まで、全て別人のようにかわってしまふという。

注・文中の園児名はすべて代えてある。

(アメリカンスクール幼稚園 アシスタント・ティチャー 丹野しげ子)

子ども、大人も同じことばで話しているのである。その為かアメリカ人が子どもに説明する時の話しぶりをきいてみると、私には大人が大人に説明している様な感じを受ける事がある。

逆に子どもが表現する時には発想そのものはすぐ子供なのだけれども使用する言葉が大人と同じ為に、表現だけ読むと子どもを実際より大人っぽく受けとめすぎてしまうことも私にはおこりうる気がした。例えば “I don't